

琉球大学学術リポジトリ

会話場面における発言抑制時の意識内容に関するアセスメントツールの開発

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 大輔, 宮城, 里緒, Ito, Daisuke, Miyagi, Rio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35568

会話場面における発言抑制時の意識内容に 関するアセスメントツールの開発

伊藤大輔¹⁾, 宮城里緒²⁾

Development of the Consciousness Scale in Conversational inhibition

Daisuke ITO¹⁾, Rio MIYAGI²⁾

問題と目的

一般的に、感情を抑制することは精神的健康にネガティブな影響を与えることが知られている。例えば、自己開示を抑制する傾向が強いほど、精神的な不健康に陥りやすいという報告(榎本, 1997)や、あきらめ、弱みの隠蔽、相手への配慮による開示の抑制は精神的健康を下げるといった報告(兪, 2010)がなされている。さらに、抑制ではなく、自己開示については、精神的健康と正の相関があることを報告する研究が多い(榎本, 1997)。しかしながら、その一方で、感情を抑制する理由によってはむしろ精神的健康を増進することや、開示度により精神的健康に与える影響は異なることが示されている。例えば、和田(1995)は自己開示と精神的健康の間に単調的増加でない関係を見出しており、自己開示と心理的幸福感との関係は、逆U字型をなす2次関数的関係であることを示している。このように、単に感情抑制の頻度や開示量が精神的健康へ影響を及ぼすのではなく、感情抑制に関わる質的な要因も精神的健康に影響を及ぼしていると考えられる。つまり、感情抑制の理由は、状況によって異なる複数の動機や原因から生じると予想され、感情を抑制する理由によって、発言抑制行動が精神的健康に及ぼす

影響は異なることが考えられる。

この点に関して、畑中(2003)は、会話場面において、自律的か他律的に関わらず、自分の意見や気持ちなどを表出しない行動を発言抑制行動(utterance inhibition)と定義し、発言抑制行動の動機という質的な要因と精神的健康に関する検討を行っている。発言抑制の一部は、コミュニケーションを制限する不適切な行動抑制であり、社会的スキルが欠如していると対人場面から逃避するために自己隠蔽を行い、個人の不健康状態につながると考えられている。実際に、畑中(2003)は、スキル不足による発言抑制は精神的健康を低下させ、会話不満足感を高めること、女性においては規範や状況を考慮した発言抑制は精神的健康を高め、会話不満足感を低下させると報告している。つまり、社会的なルールや状況を優先して自己を抑制し行動する場合は、ホンネの自分とタテマエの自分との不一致感があつたとしても、必ずしも精神的健康に悪影響を及ぼすわけではないことが示唆される。

さらに、畑中(2006)は、発言抑制行動に至るまでの意識内容に着目し、意思決定パターンと発言抑制行動の関係について検討している。その結果、発言抑制行動に至るまでの意識内容として、①適切性考慮、②否定的結果、③関係回避、④ス

¹⁾ 生涯教育課程心理臨床科学コース(准教授)

²⁾ 北中城村役場企画振興課

スキル欠如の4つを抽出している。さらに、発言抑制行動がスキル欠如と強く関連していることや、適切性考慮が適切な発言抑制行動を引き起こし、否定的結果やスキル欠如が不適切な発言抑制行動を引き起こす要因であることを明らかにしている。

従来は、個人の内心と言行が一致していればいるほど、適応的と考えられてきたが、上述したように、発言抑制に至る意識内容によっては、発言抑制による内心と言行の不一致が必ずしも適応や精神的健康にネガティブな影響を及ぼすわけではないことが示されている。したがって、畑中(2003)の発言抑制に至るまでの意識内容といった感情抑制に関わる質的な要因に関する検討が必要であるが、先行研究(畑中, 2006)においては、

発言抑制に至る意識パターンや、それらがどのような特徴を持っている人に多くみられるかを検討することにとどまっており、発言抑制に至る意識内容が精神的健康や適応感に及ぼす影響についての検討はなされていない。その理由として、畑中(2006)では、発言抑制に至る意識内容の生起の有無を2件法で評価しているため、意識内容の程度を量的に検討することができないことや、他の心理学的概念との関連も詳細に検討できないといった問題点が挙げられる。そのため、発言抑制に至る意識内容について量的に測定できるアセスメントツールの開発が必要である。

そこで、本研究では、これらの点を改善した上で、発言抑制行動時の意識内容を測定する尺度を

Table 1. 畑中(2006)の4因子構造に基づく発言/抑制行動決定時の意識内容の記述統計量

変数名	M	SD
第一因子：適切性考慮	15.04	4.04
3 慎重に言葉を選ぼうと思う。	1.94	0.74
7 その相手に対して、どのくらい話しても大丈夫かを考える。	2.18	0.79
8 相手は、自分の話を受け入れられる状態かどうかを考える。	1.83	0.86
9 相手に過干渉になりすぎるかどうかを考える。	1.60	0.90
11 その場で話すことが適切かどうかを考える。	2.02	0.72
17 一方的に言い過ぎないようにしようと思う。	1.83	0.97
19 相手が理解しやすいように話そうと思う。	2.05	0.69
22 自分は、話す(言葉をかける)立場にあるかどうかを考える。	1.59	0.85
第二因子：否定的結果	12.53	4.96
1 相手に対して失礼にあたるのではないかと思う。	1.63	0.76
4 こんなことを言ったら、他の人がどう思うだろうかと考える。	2.06	0.72
10 相手から嫌われてしまうのではないかと思う。	1.63	0.98
13 相手から拒否されてしまうのではないかと思う。	1.29	0.93
14 相手との関係が壊れるのではないかと思う。	1.19	0.92
15 相手の気分を害してしまうのではないかと思う。	1.63	0.84
16 こんなことを言ったら、みっともないかもしれないと思う。	1.30	0.95
23 その場の雰囲気が悪くなるかどうかを考える。	1.81	0.87
第三因子：関係継続意思	7.31	2.25
5 何か言うのがめんどくさいと思う。*	1.38	0.90
12 相手との関わりを避けようと思う。*	1.98	0.85
20 こんな人は、放っておこうと思う。*	1.77	0.96
25 相手と仲良くなろうと思う。	2.18	0.65
第四因子：スキル欠如	6.87	2.80
2 思っていることが言葉にならなくて困る。	1.70	0.84
6 思っていることをきちんと話そうと思う。*	1.13	0.81
18 何も言わないのが賢明だと思う。	1.38	0.94
21 何を言ったらいいか分からなくて困る。	1.56	0.95
24 どうせうまく話すことができないと思う。	1.10	0.86

Note. 逆転項目*

作成することを目的とする。具体的には、研究1において、発言抑制行動時の意識内容に関する尺度について4件法で回答を求めた上で因子構造を確認する。次に、研究2では、研究1で作成された尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

研究1

方法

1. 調査対象者

A大学に通う大学生379名を対象に質問紙調査を実施した。回答に不備のあった者4名を除き、最終的に、375名（男性183名、女性190名、不明2名、平均年齢 19.89 ± 1.58 歳）を分析対象とした。

2. 調査手続き

A県内の大学生を対象に、講義終了後に集団式調査を行った。まず、調査主旨を説明し、調査協力は任意であることやいつでも調査協力をやめることができること、回答結果が学業成績に影響にすることはないこと、データは統計的に処理されるため、個人が特定されることはないことが伝えられ、倫理的配慮を行った。そして、調査協力に同意が得られた者に対して、質問紙への回答が求められた。

3. 調査材料

(1) デモグラフィックデータ

年齢と性別について回答を求めた。

(2) 発言／抑制行動決定時の意識内容

畑中(2006)で使用された発言／抑制行動決定時の意識内容の項目を用いた。本尺度は、「この一ヶ月間、他者との会話場面において、どのようなことを考えたか」を尋ね、発言抑制行動決定時の意識内容を測定する尺度である。適切性考慮8項目、否定的結果8項目、関係継続意思4項目、スキル欠如5項目の全25項目、4因子から構成される。なお、畑中(2006)では2件法で使用されていたが、本研究においては、意識内容をより詳細に検討できるようにするため、4件法(0:まったく、1:あまり、2:わりと、3:とても)に変更して用いた。

結果と考察

まず、発言／抑制行動決定時における意識内容に関する尺度(畑中, 2006)の各項目の平均値と標準偏差を算出した(Table 1)。各項目の回答をみると、最も平均が高かったのは「7. その相手に対して、どのくらい話しても大丈夫かを考える」の 2.18 ± 0.79 点と、「25. 相手と仲良くなろうと思う」の 2.18 ± 0.65 点であり、最も平均が低かったのは「24. どうせうまく話すことができないと思う」の 1.10 ± 0.86 点であった。しかし、いずれの項目にも、天井効果、フロア効果はみられなかった。

畑中(2006)が算出した4因子構造が妥当であるかどうかを確認するために、発言／抑制行動決定時における意識内容に関する尺度に関して、4因子構造を想定した確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は $\chi^2=914.31$, $df=269$, $p<.001$, GFI=.83, AGFI=.79, RMSEA=.08であった。適合度指標について、GFIはモデルの説明力の目安となり1に近いほど説明力のあるモデルであり、AGFIは値が1に近いほど当てはまりが良いことを示す。また、RMSEAはモデルの分布と真の分布との乖離を1自由度あたりの量として表現した指標で、0.05以下であれば当てはまりが良いとされ、0.1以上は悪いとされる。以上の基準と本研究の分析結果を考慮した結果、畑中(2006)で想定された4因子が最適であるとは言えず、再度因子分析を行う必要があることが示唆された。

上述したように、4因子構造では、十分なモデル適合度が得られなかったため、新たに探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。スクリープロットの形状から3因子が妥当であると判断し、共通性の低い項目(.15以下)、因子負荷量が.40以下の項目、複数の因子に.35以上の因子負荷量を示す項目を除外して分析を再度実施した。その結果、最終的に3因子17項目が抽出された(Table 2)。第一因子は、「相手との関係が壊れるのではないかと思う」や「相手から拒否されてしまうのではないかと思う」といった内容で全4項目から構成される。これらは自分に対するネガティブな他者評価を含む内容であることが

ら、「傷つきへの恐れ」因子と解釈した。第二因子は、「その場で話すことが適切かどうかを考える」や「相手は、自分の話を受け入れられる状態かどうかを考える」といった内容で全8項目から構成される。これらは相手や状況について考慮するような内容であることから、「他者配慮」因子と解釈した。第三因子は、「何か言うのがめんどくさいと思う」や「何も言わないのが賢明だと思う」といった内容で、全5項目から構成される。これらは他者との関わりを避けるような内容であることから、「親密性回避」因子と解釈した。

探索的因子分析によって新たに抽出された3因子が妥当であるか確認するために、3因子構造を想定した確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は $\chi^2=337.47$, $df=116$, $p<.001$, $GFI=.90$, $AGFI=.87$, $RMSEA=.07$ であった。

以上の結果と適合度に関する基準に基づくと、畑中(2006)で示された4因子構造よりも、探索的因子分析によって抽出した3因子構造の方がモデル適合度は高いことが示され、発言/抑制行動決定時における意識内容に関する尺度は3因子構造が妥当である可能性が示唆された。畑中(2006)のモデル適合度が不十分であった理由としては、2値データに基づいて因子分析した点が考えられる。つまり、通常、2値データの場合は計算不能となる頻度、最適因子数の的中率の悪さ、乖離指数の大きさなど、すべての点から因子分析を適用することは推奨できない(萩生田・繁樹, 1996)とされている。本研究は、その点を考慮し、4件法で作成した上で、新たに因子構造を確認したため、結果として、よりまとまりのよい因子が得られたと考えられる。

Table 2. 発言/抑制行動決定時の意識内容に関する尺度の探索的因子分析

第一因子：傷つきへの恐れ					
14	相手との関係が壊れるのではないかと思う。	.93	-.12	-.05	
13	相手から拒否されてしまうのではないかと思う。	.91	-.09	.02	
10	相手から嫌われてしまうのではないかと思う。	.72	.14	-.07	
15	相手の気分を害してしまうのではないかと思う。	.67	.14	-.01	
第二因子：他者配慮					
11	その場で話すことが適切かどうかを考える。	-.09	.67	-.05	
8	相手は、自分の話を受け入れられる状態かどうかを考える。	-.11	.64	.02	
9	相手に過干渉になりすぎるかどうかを考える。	.04	.61	.08	
7	その相手に対して、どのくらい話しても大丈夫かを考える。	-.01	.55	.02	
4	こんなことを言ったら、他の人がどう思うだろうかと考える。	.15	.53	.06	
22	自分は、話す(言葉をかける)立場にあるかどうかを考える。	.11	.50	.13	
19	相手が理解しやすいように話そうと思う。	-.02	.46	-.22	
3	慎重に言葉を選ぼうと思う。	.15	.46	.02	
第三因子：親密性回避					
5	何か言うのがめんどくさいと思う。	-.04	.03	.66	
18	何も言わないのが賢明だと思う。	-.05	.15	.54	
20	こんな人は、放っておこうと思う。	-.04	.15	.47	
12	相手との関わりを避けようと思う。	.29	-.01	.45	
6	思っていることをきちんと話そうと思う。	.02	.32	-.43	
25	相手と仲良くなろうと思う。	.04	.20	-.43	
		因子間相関	第一因子	第二因子	第三因子
第一因子		—		.53	.44
第二因子			—		.24
第三因子				—	

研究 2

目 的

研究 2 では、研究 1 で作成された発言／抑制行動決定時における意識内容に関する尺度の信頼性と妥当性の検討を行う。

方 法

1. 調査対象者

本研究を実施するにあたり、調査に必要なサンプル数を調べるために GPower 3.1.9.2 を用いて事前の検定力分析を行った。効果量 0.3, 有意水準 0.01, 検定力 0.95 の条件で検定力分析を行ったところ、必要なサンプル数は 184 名と算出された。この結果を参考に、A 県内の大学生 177 名に調査を実施した。回答に不備のあった者 1 名を除き、最終的に、176 名（男性 75 名、女性 100 名、不明 1 名、平均年齢 20.02 ± 1.58 ）を分析対象者とした。

2. 調査手続き

A 県内の大学生を対象に、講義終了後に集団式調査を行った。まず、調査主旨を説明し、調査協力は任意であることやいつでも調査協力をやめることができること、回答結果が学業成績に影響にすることはないこと、データは統計的に処理されるため、個人が特定されることはないことが伝えられ、倫理的配慮を行った。そして、調査協力に同意が得られた者に対して、質問紙への回答が求められた。

3. 材 料

(1) デモグラフィックデータ

年齢と性別について回答を求めた。

(2) 発言／抑制時の意識内容尺度

研究 1 で作成された尺度を用いた。傷つきへの恐れ 4 項目、他者配慮 8 項目、親密性回避 5 項目の 3 因子構造、全 17 項目から構成される尺度であり、発言／抑制行動決定時の意識内容について 4 件法で測定する質問紙である。

(3) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）

他者から賞賛を得たいという欲求と、他者から拒否されたくないという欲求を 5 件法で測定する質問紙である。畑中（2003）を参考に、本研究で

は「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」や「自分の意見が少しでも批判されるとうろたえてしまう」などの項目を含む拒否回避欲求因子の 9 項目を用いた。

(4) プライバシー志向性尺度（岩田, 1987）

独居志向 7 項目、精神生活の非公開志向 2 項目、病気・身体的欠陥の非公開志向 4 項目の全 13 項目から構成され、プライバシー志向性を 5 件法で測定する質問紙である。畑中（2003）を参考に、本研究では「精神生活の非公開」志向の 2 項目を用いた。

(5) プライバシー志向性尺度（吉田・溝上, 1996）

独居 3 項目、自由意志 3 項目、友人との親密性 3 項目、遠慮期待 3 項目、家族の親密性 3 項目、閑居 3 項目、隔離 3 項目の 7 因子構造、全 21 項目から構成される。日本人のプライバシー志向性を包括的に測定する質問紙である。畑中（2003）を参考に、本研究では、日本においては一般的なプライバシー状況と思われる、「遠慮期待」（突然他人に侵入されないように心理的障壁を作り出すこと、他者に深いかかわりをとりあえず遠慮してもらいたいという態度）の 3 項目を用いた。

(6) 対人的志向性尺度（斎藤・中村, 1987）

人間関係志向性 9 項目、対人的関心・反応性 5 項目、個人主義傾向 3 項目、重複項目 1 項目の 4 因子構造、全 18 項目から構成される。他者の行動に対する関心と反応性に関する個人差である対人志向性を 5 件法で測定する質問紙である。

(7) 社会的スキル尺度（菊池, 2004）

初歩的なスキル、より高度のスキル、感情処理スキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキルの 6 つの領域からそれぞれ 3 項目、計 18 項目から構成され、対人関係を円滑にするスキルについて 5 件法で測定する質問紙である。

結果と考察

まず、各測定尺度の記述統計量を算出した（Table 3）。発言／抑制時の意識内容尺度について、合計得点は 28.27 ± 7.77 点であり、その下位因子である傷つきへの恐れは 6.28 ± 3.24 点、他者配慮は 16.20 ± 3.93 点、親密性回避は 6.94 ± 3.29 点で

あった。次に、妥当性を検討するための尺度について、社会的スキル尺度は56.55±10.93点、対人的志向性尺度の合計得点は62.14±7.49点、その下位因子は人間関係志向性31.41±4.13点、対人的関心・反応性18.8±3.45点、個人主義傾向7.88±2.1点となった。拒否回避欲求は30.22±7.37点、精神生活の非公開は8.09±2.04点、遠慮期待は13.52±4.2点であった。

次に、発言／抑制時の意識内容尺度の信頼性を検討するため、 α 係数を算出した結果、尺度全体では $\alpha = .86$ であった。さらに、下位因子である傷つきへの恐れは $\alpha = .89$ 、他者配慮は $\alpha = .80$ 、親密性回避は $\alpha = .71$ であり、いずれも十分な信頼性が確認された。そして、併存的妥当性の検討のため、①傷つきへの恐れと対人的関心・反応性、

拒否回避欲求との間に正の相関、②他者配慮と対人的関心・反応性との間に正の相関、③親密性回避と人間関係志向性、社会的スキルとの間に負の相関、親密性回避と精神生活の非公開、遠慮期待との間に正の相関を仮定し、相関分析を行った (Table 4)。その結果、傷つきへの恐れと社会的スキル、人間関係志向性に負の相関 ($r = -.47, p < .01$; $r = -.20, p < .01$)、対人的関心・反応性、拒否回避欲求との間に強い正の相関がみられた ($r = .47, p < .01$; $r = .59, p < .01$)。また、他者配慮と対人的関心・反応性、拒否回避欲求に中程度の正の相関がみられた ($r = .31, p < .01$; $r = .35, p < .01$)。また、親密性回避と社会的スキル、人間関係志向性に強い負の相関 ($r = -.50, p < .01$; $r = -.50, p < .01$)、拒否回避欲求、精神生活の非公開、遠慮期待に中程度の正の相関がみられた ($r = .32, p < .01$; $r = .37, p < .01$; $r = .32, p < .01$)。

このように、概ね想定した通りの関連が確認されたことから、併存的妥当性が確認された。一方、事前に想定していなかったものの、傷つきへの恐れと社会的スキルの間に負の相関、他者配慮と拒否回避欲求に正の相関がみられた。傷つきへの恐れと社会的スキルに負の相関がみられた点について、原田・島田 (2002) は、社会的スキルの自己評価が低いほど対人不安が強いとの報告があることから、この結果は妥当であると考えられる。また、佐川 (2013) の研究で、自分の傷つきを回避することが過剰な他者配慮に結びつくとの報告があることから、他者配慮と拒否回避欲求に負の相関が出たことも妥当と考えられる。

Table 3. 各測定尺度の記述統計量

	M	SD
発言抑制時の意識内容尺度	28.27	7.77
傷つきへの恐れ	6.28	3.24
他者配慮	16.20	3.93
親密性回避	6.94	3.29
社会的スキル尺度	56.55	10.93
対人的志向性尺度	62.14	7.49
人間関係志向性	31.41	4.13
対人的関心・反応性	18.80	3.45
個人主義傾向	7.88	2.10
賞賛獲得・回避欲求尺度		
拒否・回避欲求	30.22	7.37
精神生活の非公開	8.09	2.04
遠慮期待	13.52	4.20

Table 4. 発言抑制時の意識内容尺度と併存的妥当性検討のための各尺度との相関分析

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 発言抑制時の意識内容尺度	—										
2 傷つきへの恐れ	.84**	—									
3 他者配慮	.79**	.50**	—								
4 親密性回避	.67**	.46**	.22**	—							
5 社会的スキル尺度	-.42**	-.47**	-.07	-.50**	—						
6 対人的志向性尺度	.03	.15	.19*	-.33**	.09	—					
7 人間関係志向性	-.23**	-.20**	.07	-.50**	.35**	.79**	—				
8 対人的関心・反応性	.36**	.47**	.31**	.02	-.20**	.73**	.26**	—			
9 個人主義傾向	.02	.13	.00	-.10	-.10	.54**	.21**	.26**	—		
10 拒否・回避欲求	.54**	.59**	.35**	.32**	-.43**	.24**	-.10	.47**	.22**	—	
11 精神生活の非公開	.28**	.16*	.14	.37**	-.19*	-.15*	-.27**	.10	-.14	.15*	—
12 遠慮期待	.25**	.13	.15	.32**	-.16*	-.24**	-.30**	-.03	-.14	.12	.41**

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のように、本研究で作成した発言／抑制時の意識内容尺度は、信頼性と妥当性を有する尺度であることが示唆された。畑中 (2003) とは異なり、発言抑制に至る意識内容について量的な測定が可能になったことから、問題と目的で述べたように、今後は、発言抑制に至る意識内容という質的な側面が精神的健康や適応感に及ぼす影響に関する検討を行うことや、他者との交流場面で困難を抱える社交不安障害の病態理解などのために本尺度が用いられることも期待される。

(本邦版)に関する検討 心理学研究, 67, 50-55.
兪善英 (2010). 大学生のストレス開示抑制態度に関する研究2 日本社会心理学大会ポスター発表, 261.

引用・参考文献

- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学研究 北大路書房
- 萩生田伸子・繁樹算男 (1996). 順序付きカテゴリカルデータへの因子分析の適用に関するいくつかの注意点 心理学研究, 67, 1-8.
- 原田朋枝・島田修 (2002). 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連 川崎医療福祉学会誌, 12, 75-81.
- 畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, 74, 95-103.
- 畑中美穂 (2006). 発言抑制行動に至る意思決定過程：発言抑制行動決定時の意識内容に基づく検討 社会心理学研究, 21, 187-200.
- 堀井俊章 (2011). 大学生における対人恐怖症性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要教育科学, 13, 149-156.
- 岩田紀 (1987). 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究, 3, 11-16
- 菊池章夫 (2004). KISS-18研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6, 41-51.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 斎藤和志・中村雅彦 (1987). 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要, 34, 97-109.
- 佐川利沙 (2013). 青年期のふれあい回避傾向に関する研究—対人依存欲求と自己抑制との関連および介入法について— (http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/abstract_pdf/2512010.pdf)
- 竹安大 (2011). エクセルを用いた検定力分析 三重大学学術機関リポジトリ 研究教育成果コレクション; 宇納進一教授退職記念号, 42, 89-105.
- 和田実 (1995). 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, 11, 11-17.
- 吉田圭吾・溝上慎一 (1996). プライバシー志向性尺度